2009年度アルザスシンポジウム（人体と身体性）に向けての第2回勉強会

「人体を総合的に考える―文化を生む人間・文化に条件づけられる人間」

●報告者：川田　順造（人類学者、神奈川大学日本常民文化研究所客員研究員）
●日　時：2009年7月24日（金）18時00分～20時00分
●場　所：法政大学市ヶ谷キャンパス　ボアソナード・タワー25階　B会議室
●司　会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所兼担所員・特任教授）

2009年7月24日（金）、18時から20時過ぎまで、法政大学市ヶ谷キャンパス・ボアソナード・タワー25階　B会議室において、「2009年度アルザスシンポジウム（人体と身体性）に向けての第2回勉強会」が開かれた。今回は日本を代表する人類学者である川田順造先生から、「人体を総合的に考える―文化を生む人間・文化に条件づけられる人間」いうテーマでレクチャーをしていただいた。内輪の勉強会ではあったが外部からの聴講者も多数で、質疑応答を含めて、予定時間を大きく超える会となった。

川田先生の気宇大きくかつ含蓄深いお話の流れは、先生ご自身の「発表概要」に明示されている。そこでは「三つの側面」から「人間と文化」を扱うと述べられておられた。

第一の側面：「ヒトの身体が、哺乳動物としては稀な長い樹上生活と、他の霊長類から分かれて地上に降りての、700万年来の直立二足歩行に伴うどのような特徴によって、他の動物と異なる文化を生んだかについて考える。そこでは、ヒト一般とヒトの文化一般が問題となる」。ここでは、数例を上げれば、樹上生活によってモノを掴む力や、上肢の可動性が得られたこと、また二足歩行によってはモノを運ぶことや、声帯が下がり構音器官が発達したことなどが語られた。

第二の側面：「その文化の力によって、12－15万年からアフリカを旅立って世界の多様な地域に拡散し、多様な文化を生み出したヒトの身体が、同時に自分たちが生み出した文化によって、いかに条件づけられてもいるかを問題にする。ここでは、複数のヒトの群れと複数の文化の相互関係について、とくに私の提唱してきた〈文化の三角測量〉の方法によって、日本・フランス・西アフリカ（とくに旧モシ王国）の事例を中心に、…お話しする」。今回のレクチャーの中心部分で、先生ご自身が撮られた写真資料を豊富に用いてのお話は圧巻であった。心理学が言う「手続き的記憶」によって身体は文化の記憶を蓄積していき、異なる文化は異なる「身体技法」を形成していく。おふくろの味と呼ばれるような特有な味覚が形作られる、一定のことばを視覚・聴覚が見分け・聞き分けるようになるといったことから始め、ダンスの仕方や、農工作業とそこでの道具の使い方に至るまで、異なる文化の背後にあるのは、文化が生む異なる「身体技法」なのである。

第三の側面：「社会的存在としての人間が、どのように異なったやり方でとらえられてきたか」。このように形成された「身体技法」は、それを共有する人間集団の集団性をも規定していく。上げられていた例で言えば、個よりも集団への帰属が優先する日本社会では、たとえば「アイデンティティ」といった言葉は翻訳不可能にとどまる、といったことにもなるのである。

このように、一見して限界づけの役割も持つとはいえ、個々の文化の在り方をグローバリゼーションの名の下で消し去り平準化していくような傾向は容認できない、それが締めくくりとして先生が述べられたことであった。先生に従えば、文化はグローバルな力がやがては飲み込んでいくであろう、ただローカルなものと見なされてはならないのであり、個々の文化はその特殊性において普遍的な価値を持つとむしろ考えてゆかねばならないのである。

以上、今回の勉強会では、身体の問題が実は文化の問題の中心に位置づくということ、つまり、今更ながらではあるが、身体論の根本意味について、たいへん貴重なご教示をいただいたわけである。

【記事執筆：安孫子　信
（法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授）】

川田　順造　氏

会場の様子

Academic Frontier Sub-project 1: Developing 'International Japanese Studies' as Research on an 'Other' Culture

2nd Study Meeting in Preparation for the 2009 Alsace Symposium "Body and Embodiment"

"General Thoughts on the Human Body: Humans Shaping Culture, Humans Imposing Conditions upon Culture"

Speaker　KAWADA Junzo (Anthropologist; Visiting Researcher, Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University)
Date　Friday, 24 July 2009, 18:00-20:00
Venue　Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25F Conference Room B
Chair　Josef KREINER (Special Adviser, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Special Professor, Hosei University)

Why should Japanese Studies, which is above all an academic discussion of culture, raise the issue of the human body? This was the question answered for us by Professor Kawada, leading Japanese anthropologist, at this study meeting. First of all we can say that people possess a culture that is based around the characteristic features of the body functions involved in walking on two feet, and that different cultures grow from subtle differences in the use of those body functions. Culture, having been formed in this way, then poses conditions upon the human body of individuals belonging to a shared society by way of customs in "body techniques", ranging from the vocalization of language to methods of dancing and working etc. The body shapes culture, and culture shapes the body. The main thrust of Professor Kawada's argument is, thus, that body theory itself must form the basis of any cultural theory.

Report by ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

学术开拓推进项目①
构筑以异文化研究为视点的国际日本学
面向 2009 年度阿尔萨斯・"人体与身体性"研讨会的第 2 次学习会

"对人体的综合性思考 —人育文化・文化育人"

报告人：川田　顺造（人类学者、神奈川大学日本常民文化研究所客员研究员）
时　间：2009 年 07 月 24 日（周五）18：00-20：00
地　点：法政大学市ケ谷校区布瓦索纳德大楼 25 层 B 会议室
主持人：约瑟夫・库拉伊那（法政大学国际日本学研究所兼任所员・特任教授）

日本学作为一门以探讨文化为首要任务的学科，为何要将身体作为研究课题之一呢？在此次学习会上，日本人类学界的代表性人物川田先生专门针对这一问题，作了详尽的论述。川田先生认为，人类正是因为具有了直立行走这一身体机能的特征，才逐渐创造出了自己的文化。而不同的文化也正是源于不同人群对自身身体机能使用过程中的微妙差异。由此而形成的各种不同文化又通过人们的身体对语言的发音、舞蹈的动作、劳动的姿态等"身体技法（technique du corps）"的学习与掌握，为共有该文化的社会中的每一个成员打上该文化的烙印。因此，可以说，人们的身体产生了文化，而文化又塑造了人们的身体。由此可见，身体论在文化论中所占有的根本性地位。

【执笔人：安孙子　信
（法政大学国际日本学研究所所长・文学部教授）】

학술 프론티어 서브프로젝트①
이문화 연구로서의「국제 일본학」의 구축
2009 년도 알자스 심포지움「인체와 신체성」에 관한 제 2 회 연구회

「인체를 종합적으로 고찰하다—문화를 생성하는 인간・문화에 좌우되는 인간」

・보고자　가와다 준조（川田順造，인류학자，가나가와대학（神奈川大学）일본상민문화연구소 객원 연구원）
・일　시　2009 년 7 월 24 일(금) 18 시 00 분～20 시 00 분
・장　소　호세이대학（法政大学）이치가야 캠퍼스 보아소나드타워 25 층 B 회의실
・사　회　요셉・크라이너（호세이대학　국제일본학연구소 겸담 소원・특임교수）

무엇보다 문화를 논하는 학문인 일본학이 왜 신체를 문제로 삼아야만 하는가，하는 것이 일본을 대표하는 인류학자，가와다씨가 본 연구회에서 교시한 내용이다．인간은 우선，두발 보행이라는 신체기능의 특징을 전제로 하여 문화를 소유하게 되었다．뿐만아니라，다른 문화들 또한 그 신체기능을 미묘하게 다른 방식으로 사용함으로 인해서 발생된 것이라 할 수 있다．그렇게 형성된 문화는 결국 그 문화를 공유하는 사회에 속한 개개인의 신체에，언어의 발성으로부터 댄스나 노동의 방법에 이르는「신체기법（technique du corps）」의 습득을 통해서 조건을 부여한다．신체는 문화를 낳고，문화는 신체를 낳는다．따라서，신체론이야말로 문화론의 근본임을 인식해야한다는 것이 가와다씨 강연의 논점이었다．

【기사 집필：아비코 신（安孫子　信，
호세이대학 국제일본학연구소 소장・문학부 교수）】